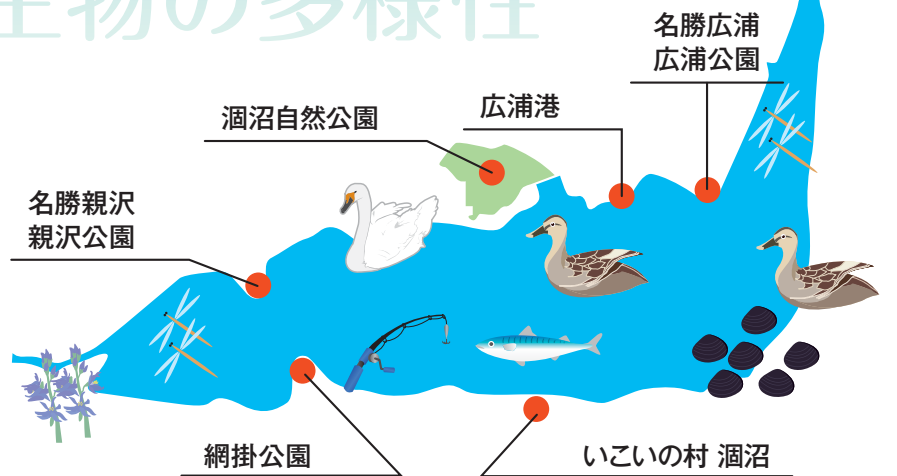


涸沼の今と歴史

涸沼に見られる生物の多様性



茨城県のほぼ中央部に位置する涸沼はヒヌマイトトンボの生息地として知られています。涸沼は今から6000年前には海でしたが、気温が下がるにつれ海面が後退し、さらに那珂川の洪水でたまった砂により涸沼川の下流がふさがれて形成されました。満潮時には海から那珂川を介して涸沼川へと海水が流れ込むため、海水と淡水が混じり合う全国的にも希少な汽水湖で、流域には多くの動植物が生息しています。産業の歴史をみると古くは汽水域に生息する魚や貝の漁場となり地域は今でも有名なヤマトシジミやマハゼ、ウナギなどの水産業が盛んです。昭和初期までは涸沼ニシンと呼ばれるニシンが多く生息し水産業の支えとなっていたましたが、現在はニシンの情報を聞くことはありません。昭和期に入ると干拓事業や釣りをメインとした観光的な活用もはじまり、地域との関りが一層強まってきました。昔は水もきれいで涸沼はプール代わりとなり、沿岸の子どもたちには格好の遊び場でした。昭和40年代までは水生植物の宝庫としてサンショウモ、オオアカウキクサなど18科42種の植物が記録されていました。野鳥も豊富で、昭和34年にはコウノトリ、同63年にはアネハヅルが飛来してきました。

この涸沼が今、「ラムサール条約湿地」登録候補として注目を集めています。大切に受け継がれてきた涸沼の自然をよりよい姿で次代へ繋ぐためにも、ラムサール条約湿地登録を目指していきましょう。

汽水湖が貴重な動植物を育む大切な湿地



ヒヌマイトトンボ(絶滅危惧IB類) 発見者: 廣瀬誠氏、小菅次男氏

昆虫

1971年(昭和46年)涸沼湖岸のヨシ原で発見された汽水域に生息するイトトンボで、茨城町の天然記念物に指定されています。涸沼はヒヌマイトトンボの生息地であることで、条約登録基準を満たしています。



ミズアオイ(準絶滅危惧)

7月下旬から9月下旬にかけて開花し、きれいな青紫の花を咲かせます。



タコノアシ(準絶滅危惧)

8月から9月に白や黄色の花を咲かせ、やがて全体が紅色に染まります。

植物

ミズアオイやタコノアシ、オオクグなど県のレッドデータブックに掲載されている貴重な植物種が現存しています。

水鳥の宝庫 涸沼

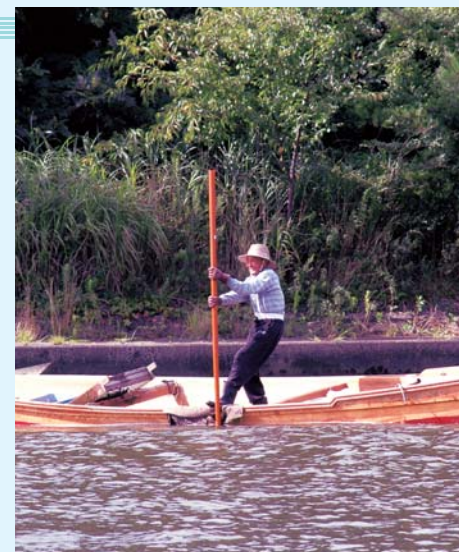


スズガモ(写真: 小柳恵氏)

スズガモは冬、北から渡ってきます。貝類が大好物。スズガモが多く飛来する年は、シジミが豊漁であるなど、鳥に視点を当てることにより、環境の様々なことが見えてきます。毎年、条約登録基準である東アジア個体群の1%(2500羽)を超える数が飛来しています。

漁業

全国でも有名なヤマトシジミ。大粒でおいしいシジミとして地域産業にも貢献しています。



シジミ漁の様子(写真: 安秀一氏)

涸沼の四季 (写真提供: 佐藤宗文氏)



春爛漫(2002.4)



雨あがり(1997.10)



盛夏(1990.7)



冷えた朝(1997.12)



オオワシ(写真: 若山侑蔵氏)

オオワシは毎年1月下旬から3月中旬にかけて涸沼に飛来します。



オオセッカ(写真: 明日香治彦氏)

オオセッカは、スゲ原など自然護岸が残る低湿地に生息しています。

年間を通じて多くの渡り鳥たちが羽を休めにやってくる涸沼。雄大な自然の中、大空を舞う優雅な鳥たちに会える貴重な水辺空間となっています。涸沼は、汽水域という恵まれた生態系に支えられ、涸沼とその周辺には200種を超える野鳥の生息が確認され、そのうち渡り鳥が約75%を占めています。オオタカ、ミサゴ、チュウヒなどの希少種に加え、ここ数年、オオワシも越冬のため飛来しています。また、マガモ、スズガモ、オンドリなどの水鳥や、春秋にはシギやチドリ類も多数飛来しているほか、周辺水田ではコハクチョウが越冬するなど、まさに渡り鳥の宝庫と言える湖沼です。

